科学史のこぼれ話（その5）

エマニュエル　カントのエッセイのことなど

㈶原子力データセンター
理事長　能　澤　正　雄

翻訳小説「ワグラムの戦い」ジル・ラプラージュ著，鷲見洋一訳，新潮社刊は数年前に各新聞の書評で激賞された。内容は，ナポレオン一世のオーストリア攻略の，なかでもウィーン郊外ワグラムをめぐっての戦い（1809年7月）の時代を背景としたオーストリア・ハンガリー帝国ハプスブルグ王朝の美しいザクセン公妃と若い美男の士官オットーとの悲恋物語である。時代背景がしっかりと書き込まれ，翻訳も優れていて，ぐいぐいと人を引き付ける迫力に満ちた小説であった。その中で，この主人公の男性がカントを読んでいると言うので，彼は危険思想の持ち主なので近寄らないほうが良いと人々が噂をする場面がある。

その昔，私は岩波文庫の純粋理性批判などのいわゆる三批判書の翻訳書を手にしたが，どうしても読み進めずに降参した覚えがある。カント以降の哲学は，彼の業績を無視することは出来ないと聞いていたが，それにしても，これらの哲学書を含めカントの著書が何故，危険思想を述べ，それを醸成するのであろうか。

カントは，プロシャのケーニッヒスベルク（第二次世界大戦の結果として現在ではロシア内のカリーニングラード）で1724年，4月22日に馬具職の家の4番めの子供として生れた。キリスト教敬虔主義（ピエティズム）信仰の彼の母は，この子供の知的能力を早くから認識していたようで，8歳になると彼を学校コレギアム・フリデリシアナム（グラマー・スクール）に入れる。その他のことも含め，彼はこの母のことを終生感謝していたと言われる。その頃のプロシャの学校の教育はラテン語の習得が主であって，数学とか論理学については概略しか教えなかった。

16歳で大学に入る。当時のプロシャの慣例として，何らかの職業につくための学問分野，たとえば，神学，法学，医学などに属することを求められるが，彼はこの慣例に従わなかった。即ち，神学を含めてすべての分野の講義に出席している。

1747年，カントはケーニッヒスベルク大学の哲学部紀要に最初の論文を発表している。卒業論文である。標題は，「活力の真の測定についての考察」というものであった。ここで言っている活力とは，現在我々が運動のエネルギーと呼んでいるものである。解説書によれば，カントはこの論文のなかで，我々が経験している三次元の世界は，おそらくもっと多様な空間の形の特殊な例に過ぎないのではないかという推論をしている。

20世紀前半の指導的な数学者ヒルベルト（1862～1943）は，やはりケーニッヒスベルクの生れでカントを尊敬していた。彼の数学基礎論にはカントの純粋理性批判の方法論が影響を与えているといわれる。同じ，この地の生れの科学者にはブンゼンと協力して光分析法の確立をしたことをはじめ，多方面で活躍したキルヒホッフ（1824～87）がいる。ベッセルはこの地で永年に亘って天文台長を勤め，楕円関数論を書いた。

大学を卒業したカントは，その当時の慣例

にしたがって，田舎の牧師の，ついである富豪の，子弟達の住込み家庭教師として約7年を過ごすことになる。フィヒテもヘーゲルも精神的な苦痛を堪えながら同様の経験をしている。カントの場合は，これらの家庭から終生，尊敬を受け，良い関係を保ったといわれる。

1755年6月12日，論文「火について」でケーニッヒスベルク大学から哲学博士号を取得したカントは，同年9月27日彼の大学における講義をする資格を求める論文「形而上学認識の第一原理の新解釈」を提出し，公開討論会で自論を擁護することに成功し，マギステル（大学私講師：プリヴァートドツェント）として講義を開始することが認可される。そこで，ケーニッヒスベルクに帰ってきた31歳の彼は，彼の寄宿していたキプケ教授の家で最初の講義を行なった。この家には広い講義室があったが，多くの学生がつめかけ，玄関口から入り口階段まで人で埋まったと言われている。このような大勢の聴衆を予期しなかったカントはうろたえて平静さを失い，何時もよりずっと小声で話し，しばしば言い違えては訂正をしたと言われる。

何故このように多くの聴衆が集まったかについては，カントがこの上なく広い学識の持ち主という予想が学生たちの間にあったからだとされている。当時，若し出版されていたなら彼の著作者としての評価を確立し得たはずの著書「一般自然史と天空の理論」はまだ出版社の倉庫に封印されたままであった。なぜなら出版社が倒産し，全在庫品が差し押えられてしまっていたからである。だから，カントについてのこのような期待はこの著書によってではなかった筈である。ところで，この論文のなかにニュートン力学を宇宙起源論にまで拡張した考察，後に“カント・ラプラスの星雲説”として知られる考えが述べられている。彼が講義を始めたときに，世に知られていた彼の科学的な仕事は，1754年に書いたエッセイ，「昼と夜を引き起こす地球軸の回転に，その極く初期の時期以来いかなる変化があったかの探求」および「地球が物理的に老いているかどうかの考察」の二点のみであった。彼は日常の会話や個人的な接触で多くの人の高い評価を得ていたのであった。

教育活動に入ったカントではあるが，彼の収入は聴講者に依って支払われる聴講料だけというふうに生活基盤は弱く，蔵書を売るなど経済的に不自由を強いられたようである。その上，講義のために多大の時間を取られていた。第一年目1755～56の講義科目は，論理学，数学，形而上学であったが，第二年目にはそれに倫理学が加わっている。1761年になると，論理学，形而上学，力学，理論物理学，地理，算数，幾何，三角法そして論争法となっている。結局，週に34～36時間にもわたる時間を教育に当てているのであった。

1761年から63年にかけて，ベルリン科学アカデミーは“科学としての形而上学は数学と同等な確実性を持ち得るか?”と言う標題で懸賞論文を募集した。当時のドイツの代表的な思想家達，カントを含め，ランベルト，ティーテンスそしてメンデルスゾーンが関心を示したのであった。カントは論文“神の存在の証明のための唯一の可能な基礎”を執筆中であったが，締切近くになって応募論文“自然神学と道徳の原理の相違の探求”を作成し提出した。1763年5月，賞はメンデルスゾーンに与えられた。しかしベルリン科学アカデミーは，カントの論文も殆ど賞に値すべきものとして，メンデルスゾーンの受賞論文と共にアカデミー会報に収録したのであった。また一方，前者の論文“神の存在の証明…”が刊行された時に，メンデルスゾーンは文献摘要誌「リテラツゥル・ブリーフ」にその評論を載せた。この二つの出来事によってカントの名はドイツ国内外で広く知られることとなる。

ここに言うモーゼス　メンデルスゾーンは

ドイツ生れのユダヤ人で，啓蒙哲学者として知られ，彼の長男ヨセフは大銀行家として成功し，アレキサンダー　フンボルトの後援者であった。次男のアブラハムは長兄を助けると共に自らは人文学者であった。アブラハムの子供の一人がホ短調のバイオリン協奏曲やスコットランド交響曲の作曲で知られるフェリックス　メンデルスゾーンである。したがって，モーゼスはフェリックスの祖父にあたることになる。

カントの境遇は長い間改善されなかった。論理学と形而上学の講座に空席があったので，1756年4月カントはフレデリック二世宛に教授職への応募書類を提出したが，ロシアとの戦争の危険が迫っているのでプロシャ政府は，それを空席のままにしておくことにしたのであった。1758年，論理学と形而上学のキプケ教授が亡くなったので再び応募したのであったが，この時は東プロシャ全域がロシアの占領下にあり，決定は大学の哲学部のみならずロシア政府の代表も参加して行なわれた。結果はカントより12才年長のバックが任命されたのであった。1764年8月，カントは詩学の教授にならないかとの申し出でを受けるが辞退する。このことは空席が出来次第にカントが教授職を得ることを意味したのである。エアランゲン大学，ハッレ大学からの教授職の勧誘はあったがカントはこれらを引き受けなかった。その結果，実際彼が教授に任命されるまでさらに6年の歳月を要したのであった。

1770年，ケーニッヒスベルク大学はカントを論理学形而上学の正教授に任命する。1775年から1781年に至るまで，カントはなにひとつ重要な論文を書いていない。つまり，この期間，彼はやがて「純粋理性批判」となって結実する仕事に没頭していたのであった。その初版は1781年に現れている。後々まで大きい影響を与えることとなるこの本に対する初期の反響はカントを痛く失望させた。見識を備えていると彼が考えていた同時代の哲学者達が，殆ど注目しなかったのである。

さて，この小文はカントの若干のエッセイについて紹介したいというものだった。その一つは「啓蒙とは何か，という問いに対する答え」であって，“ベルリン月刊”の1784年12月号に掲載されたものである。彼の定義によると，“啓蒙とは，人間が自分の未成年状態から抜けでることである”となっている。この定義から出発してカントは，“啓蒙を成就するに必要なものは，実に自由に他ならない，しかもおよそ自由と称せられる限りのもののうちで最も無害な自由—すなわち自分の理性をあらゆる点で公的に使用する自由である。”ということを導いている。彼は理性の公的使用と私的使用を区別している。自分の理性を公的に使用することは，いつでも自由でなければならない，これに反して自分の理性を私的に利用することは，時としていちじるしく制限されてよい，そうしたからとて啓蒙の進歩は格別妨げられるものではない，と。

ここでカントが言っている理性の公的使用というのは，ある人が学者として，一般の読者全体の前で彼自身の理性を使用することを指している。一方，私的使用というのは，公民としてある地位もしくは公職に任ぜられている人が，その立場に於いてのみ彼自身の理性を使用することが許される，このような使用の仕方が，すなわち理性の私的使用なのである。

公共体の利害関係を扱う多くの事業においては，その公共体を構成する若干の人たちに，あくまでも受動的な態度を強要するようなある種の規制が必要である。それは，この人たちの活動を諸種の公共目的と人為的に一致せしめるため，あるいは少なくともこれらの目的を転覆させないためである。このような場合には，自由な論議はもとより許されない，ただ服従あるのみである。しかし，かかる機構の受動的部分を成す人でも，自分をそ

の公共体の一それどころか世界公民的社会の一員と見做す場合には，本来の意味における公衆一般に向かって，著書や論文を通じて，自説を提出する学者の資格において，論議することは一向に差し支えないのである。

カントは，このように啓蒙について所論を展開し軍人と僧職の場合を例として論を進めている。これを現代に当てはめて，色々な職業について考えてみることが出来よう。

つぎに，1795年にケーニッヒスベルクで出版され，翌1796年に増補版が出された「永遠平和のために」を見てみる。これには当時の西欧諸国が植民地獲得に奔走していることを批判している部分がある。まず，彼が述べている諸条項を列挙する。

第一章は，前提となるべき予備条項として；(1)将来の戦争の種をひそかに保留して締結された平和条約は，決して平和条約とみなされてはならない。(2)独立しているいかなる国家も，継承，交換，買収，または贈与によって，ほかの国家がこれを取得できるということがあってはならない。(3)常備軍は，時とともに全廃されなければならない。(4)国家の対外紛争にかんしては，いかなる国債も発行されてはならない。(5)いかなる国家も，他の国家の体制や統治に，暴力をもって干渉してはならない。(6)いかなる国家も，他国との戦争において，将来の平和時における相互間の信頼を不可能にしてしまうような行為をしてはならない。たとえば，暗殺者や毒殺者を雇ったり，降伏条件を破ったり，敵国内での裏切りをそそのかしたりすることが，これに当る。

以上の六つの予備条項が殲滅戦争を防ぎ，永遠平和への展望を開くための諸条項であったのに対して，次に永遠平和が実現するための具体的な諸条件が述べられる。即ち，カントは確定条項として第二章を提示する。第二章；(1)各国家における市民体制は，共和的でなければならない。(2)国際法は，自由な諸国家の連合制度に基礎を置くべきである。(3)世界市民法は，普遍的な友好をもたらす諸条件に制限されなければならない。これらそれぞれの項目についてなぜそうあるべきかが詳しく論じられているが，ここでは第二章の最後の項目の叙述を抜粋して紹介する。

この節(3)で扱われているのは，人類愛などではなくて，権利に関することである。ここで言う友好は，外国人が他国の土地に足を踏み入れても，それだけの理由でその国の人間から敵意をもって扱われることはない，という権利のことである。外国人が要求できるのは，客人として扱われる権利ではなくて，訪問の権利である。この権利は，地球の表面を共有する権利に基づいて，互いに交際を申し出ることが出来るといった，すべての人間に属している権利のことである。地球の表面は有限な球面で，人間はこの地表の上を無限に分散していくことは出来ず，結局は併存して互いに忍耐し合わなければならない。人間はもともと誰一人として，地上のある場所について，他人よりも多くの権利を所有している訳ではないのである。

ところで，我々のヨーロッパ大陸の文明化された諸国家，特に商業活動の盛んな諸国家の非友好的な態度をこれに照らしてみると，彼等が他の土地や他の民族を訪問する際に示す不正は（訪問することは，彼等にとって，そこを征服することと同じ事を意味するが），恐るべき程度にまで達している。彼等がアメリカ，黒人地方，香料諸島（モルッカ諸島），喜望峰などを発見したとき，それらを誰にも属さない土地であるかのように扱ったが，それは彼等が住民たちを無に等しいとみなしたからである。

それゆえ，中国と日本（ニポン Nipon）が，これらの来訪者を試した後で，次の処置を執ったのは賢明であった。すなわち前者は，来航は許したが入国は許さず，後者は来航すらもヨーロッパ諸民族のうちの一民族にしか

すぎないオランダ人だけに許可し，しかもその際に彼等を囚人のように隔離し，自国民との交際から閉め出したのである。

このような住民無視の不正の状態でもっとも悪いこと（道徳的裁判官の立場から見れば，むしろもっともよいこと）は，かれらヨーロッパ人がこの暴力行為から決して好結果を得ていないこと，これらの商業組織がすべて崩壊の危機に瀕していること，またもっとも残酷でもっとも巧妙な奴隷制の本拠である砂糖諸島（西インド諸島）が，なんら実益をあげ得ず，ただ間接的に，あまり称賛できない意図のために，つまり艦隊の乗組員を養成するために，したがってヨーロッパでふたたび戦争を行なうために役立っていること，であって，しかもこれらすべてを行なっているのは，不正を水のように飲みながら，宗教的敬虔について空騒ぎし，自らを正統な信仰ゆえに選ばれたものとみなしている列強諸国なのである。以上カントから。

これを見ると，カントは当時の事態を公正に観察していたことがよく分かる。

フリードリッヒ２世（フリードリッヒ大王）の治世（1740 − 86）には，特に苦情が出なかったカントの諸論文も，大王の死と共に情勢が変わってくる。カントが「単なる理性の限界内における宗教」の出版をめぐって当局の忌諱に触れ，1794年４月，宗教に関する講義や著述の禁止を言い渡された有名な事件が起こっている。しかし，以上に見たように，カントはそれ以降も，宗教以外の諸分野で多くの論文を刊行している。これらを考えると，当時の支配階級にとって冒頭に述べたカントの思想が要注意であるというのも分かるような気がする。ちなみにカントの読書範囲は広範にわたっている。なかでも，彼はJ.ロックの経験主義的認識論をさらに徹底させたD.ヒューム（1711 − 1776；主著「人性論」「英国史」「人間悟性の研究」等）を哲学者，著述家として大変評価し，また啓蒙思想家であり自然に帰れをモットーとしていたJ.J.ルソー（1712 − 1778；主著；「人間不平等起源論」「社会契約論」「エミール」等）を大いに称賛していた。たとえば，「エミール」がはじめて手に入った時には，規則正しい毎日の散歩をしばらく中止したほどであった。

ここではカントの主著である，純粋理性，実践理性，判断力の三批判書には触れなかった。山本夏彦氏が，カントの著書の初期の翻訳について，月刊誌「文芸春秋」平成3年10月号のコラム記事「愚図の大いそがし―岩波物語」の中で辛口の批評を書いているので紹介しておこう。お読みでない方もあろうかと思うので関連部分をそのまま引用してみる。“天野貞祐訳カントの「純粋理性批判」は岩波（文庫）で最も売れた本の一つである。これが日本語かと思われるほどの翻訳で，教師が原書片手に逐語訳するのを生徒が同じく原書片手に理解するのをそのまま活字にしたのだろう。なまじ哲学科出身の岩波にはぼんやり分かったのだろう。これがすべて間違いのもとだった。…”しかし最近では，新しく翻訳し直したものが出ていることを申しそえておきたい。

カントの著書からの引用は下記の文献によった，

1）E. Cassirer, English translation by J. Haden, "Kant's life and thought" Yale University Press, 1981.

2）E.カッシーラー著　門脇卓爾，高橋昭二　浜田義文監修「カントの生涯と学説」みすず書房，1986

3）カント著　篠田英雄訳「啓蒙とは何か」（岩波文庫），1974

4）カント著　宇都宮芳明訳「永遠平和のために」（岩波文庫），1985

5）S.ケルナー著　野本和幸訳「カント」みすず書房，1977